

氏名 田中<sup>たなか</sup> 智子<sup>ともこ</sup>

田中智子氏『古今和歌六帖とその時代』は、十世紀後半に成立した『古今和歌六帖』(以下、古今六帖)の研究である。従来古今六帖は、万葉歌の流入や枕草子や源氏物語への影響が指摘されつつも未解明な点も多かった。本論文は、成立事情・構成・同時代の諸作品との関係等を考察するものであり、四部構成に序章終章を加えた全十四章からなる。

第Ⅰ部「古今和歌六帖の構成」第一章は、古今六帖の目録の構成に注目、芸文類聚や初学記といった類書や古今集の編纂意識に学んだと指摘する。第二章は、古今六帖第一帖「歳時部」が、暦月と年中行事を核としつつも月次屏風や歌合をもとに複数の分類基準の枠組みを混在させて構成されていると論じる。さらに第三章は、古今六帖第五帖「雑思部」の諸項目が、古今集の編纂意識を咀嚼しつつ独自の配列を具現化していると結論付ける。

第Ⅱ部「古今和歌六帖の撰集資料」第一章は、古今六帖所載の万葉歌と万葉集諸伝本とを比較検討し、桂本と近いと指摘しながらも、古今六帖が万葉集の古点を離れて平安和歌としてのわかりやすさを獲得していると論じる。第二章は、古今六帖が〈物〉に基づいた和歌分類の方法を万葉集巻十に学んだと考察する。第三章は、源順の大饗屏風歌の成立背景や年代の検討から、古今六帖の撰者や成立年代を解明する。

第Ⅲ部「和歌史のなかの古今和歌六帖」第一章は、古今六帖の物名歌が三代集の物名歌に比べて特異な語が少ないことに注目、第二章は古今六帖第四帖「恋部」〈面影〉項と共通の発想が源氏物語中の「面影」の語の使用に認められるとし、第三章は実方集における古今六帖の享受、たとえば〈紫〉項の歌に基づいた贈答歌制作等について論じる。

第Ⅳ部「初期定数歌歌人の研究」では、古今六帖成立期の歌人や歌壇史的情况を探求する。第一章は曾禰好忠集の「つらね歌」を表現に即して分析、第二章は好忠が円融院子の日の御遊の歌会から追放された事件と翌日の歌について考察、第三章は毛詩「鶴鳴」編をふまえた述懐歌が源順等に多数詠まれたことを指摘するなど、表現に即した多面的な論考を含んでおり、研究の広がりや豊かさが見て取れる。

上述のように本論文は、古今六帖が、勅撰集や私家集、歌合や屏風歌、万葉集の訓読作業等の活動の成果を貪婪に吸収して編纂され、広く享受された様相について、一見微視的な考察を重ねながら、平安中期の和歌史の動態を巨視的に再構築するものとなっている。

本論文は、微視的で詳細な表現分析と巨視的な文学史的展望の双方を兼ね備えており、研究水準は実に高く、将来性も確かである。より精緻な解釈が望まれる箇所も残るものの、総じて完成度は高く、創見に満ちている。以上のことから、本審査委員会は本論文に上記のような研究史的意義を認め、博士(文学)の学位に十分値するとの結論に至った。